雑感「行政に〝喝〟」

住職　千坂げんぽう

立春という言葉は、春を待ちこがれる北国の人間に特別な感情をもたらす。

この大寒、立春などという二十四節気は、太陽の公転を二十四分し、月の満ち欠けによる暦がずれてきて四季に合わなくなるのを修正するためのもので、中国人のバランス感覚が分かる文化遺産といえよう。

このように人との関わりを持つ全てが文化たりえるのであり、従って文化遺産も建造物だけとは限らない。

良き例がドイツのドレスデン・エルベ峡谷である。風光明媚とされるこの峡谷は、自然遺産ではなく、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産なのである。

峡谷を含む自然と城下町が一体となっていること、峡谷の自然景観が人間の営みと共存していて破壊されていないことが評価されている。

ところが近年、観光客増をはかろうとする地元が、峡谷にフォレスト・キャッスル橋をかけようし、反対する市民運動と対決してきた。紆余曲折の結果、橋が出来そうだが、それに対してユネスコは、橋が出来れば遺産登録を取り消すと明言している。

ユネスコを初めとする世界の潮流は、生態系、景観を重視し、人並びに人の造形物と自然が融け合うことを求めているといえよう。

日本においても宮城県では、昨年、化女沼（けじょぬま）がラムサール条約の認定地になった。また、今年は、マガンのために冬でも水田に水を張っている蕪栗沼（かぶくりぬま）周辺の地域が、森林文化協会などが主催する「にほんの里100選」に選定された。これら一連の認定は、地域の人々による鳥との共存の取り組みが評価されたものである。

翻って我が岩手県では、このような潮流を受け止めているといえるだろうか。昨シーズンは伊豆沼、長沼、蕪栗沼から餌取りにマガンの群れ（推定約一万羽）が一関遊水地に飛来してきていた。

そのため、黄昏時、一斉に一関市の市街地上空を伊豆沼方面に雁行していく様は、毎日見ていても飽きなかった。生き物たちの生命満ちあふれる姿は、まさにこの世の「浄土」を思わせた。

ところが今シーズン、黄昏時の雁行は全く少なくなった。一関遊水地内に残されている最後の湿地帯を埋める工事をしているからである。

一関地方は西は奥羽山脈、東は北上高地、南は須川岳（別称・栗駒山）の噴火による溶岩流が作りだした磐井丘陵帯（岩手、宮城県境沿いに伸び北上高地につながる）に囲まれている。

蕪栗沼（湿地再生地）

冬は須川岳が衝立となり雪を阻み、夏のヤマセによる湿気と太平洋沿いを北上する低気圧による雨は北上高地と磐井丘陵帯が阻む。このため、年間雨量が一二〇〇ミリと少ない。

雨が少ないのは暮らしやすさにつながるが、水を必要とする農業や動植物の生育にとっては厳しい条件といえる。しかも、沖積平野と異なり溶岩流の造り出した土壌は栄養分が少ない。

このように農業にとっての悪条件と闘いながら、磐井丘陵帯の萩荘では、ため池を造り棚田を開発し、厳美本寺地域では湧水、小河川を利用して稲作をしてきた。

悪条件は、大型の土地改良を阻み、生産面から見れば遅れた地域となったが、生物多様性という点で見ると、「周回遅れのトップ」ということになった。

従って、今回、にほんの里100選に選定された「萩荘・厳美の農村部」の、とりわけ萩荘については、蕪栗沼と共通要素があるという点を見逃すべきでない。

一関遊水地も磐井丘陵帯が創った湿地帯であり、それが持つ「浄土」的な面（生物多様性に満ちた世界）を簡単に切り捨てる施策は如何なものか。せっかくの宝を簡単に消滅させて豊かな未来は来るのだろうか。

（岩手日報2009年2月2日掲載「いわての風」より）